

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



親鸞聖人ご得度の地「青蓮院」

9月

September 2018

No. 15

親鸞聖人 ゆかりの地を訪ねて

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、その後関東でのご教化を経て九十歳でお亡くなりになりました。そんな聖人を想う人々が、その実像を追い求め史実を探し、史実の空白のなかから伝承が生まれ、そこから新たな旧跡が現れてきました。ここでは、そんな聖人のゆかりの地を訪ねていきたいと思います。

【青蓮院】

(京都市東山区粟田口三条坊町)

松若丸(親鸞聖人)は満九歳の時に出家されました。

その理由について諸説あります。父は四歳の時に亡くなったと伝えられています。そして、母が八歳の時に病死し、独りになってしまったことが、大きなきっかけとなっているようです。

また、平家が凋落し源氏が台頭する時代にあつて、藤原氏の分派である日野家にもその混乱の影響が響き、実父も亡くなったのではなく身を隠していた事が史料によって確認されています。

これらの生活環境の変化によって、松若丸は出家を勧められたのでしよう。結果的にそれが、大きな仏縁となったのでした。青蓮院は比叡山延暦寺に所属する天台宗の寺院です。

春の夕方、暗くなる頃に青蓮院を訪れた松若丸に、住持であつた慈鎮和尚(後の天台座主 慈円)は、「今日は遅いから明日にしましょう」と言われま

した。その時に松若丸は、

明日ありと 思う心の仇桜 あだざくら
夜半に嵐の 吹かぬものは

と無常観を詠まれたと伝えられています。その志に打たれた慈鎮和尚は、その日のうちに松若丸を剃髪し、得度式を執行したのでした。

ここから、親鸞聖人の求道の日々が始まったのです。





【捨離】

「ゾリゾリ、パサ。ゾリゾリ、パサ」。
初めて剃刀で頭髪を剃ってもらった六
十年以上も前のことながら、何故か耳
の底に鮮明に残っている。

昭和三十一年、愚生十二才の夏、先
考（父）に連れられて京都本願寺に於
いて得度式を受けた。得度式を受ける
折には、剃髪が定めということ、東
本願寺の向かいの路地を入った処の小
さな旅館の浴室で、先考に剃ってもら
ったのであるが、その時のことが昨日
のことのように脳裏に泛んでくるので
ある。後で聞いた話では、得度式を受
ける多くの人は、散髪屋さんへ行つて
剃髪してもらうとのこと。京都の散髪
屋さんも、夏の得度の時期には何人も
の人を剃髪するということで、馴れた
ものだそうである。愚生は直接先考の

手で剃ってもらったことが鮮明に記憶
に残る結果となったのであろう。愚生
が得度のために京都へ赴いた時、「得度
式」を受けるといふことは如何なる意
味のあることなのか、それほど深く考
えることもなく、「真宗の寺に生まれた
ので、小坊主になるために本山へ行つ
てその儀式を受けるのだ」くらいの認
識しかなかったのである。



親鸞聖人ご得度

浄土真宗の開祖とされる親鸞聖人は、
僅か九歳の春、伯父の日野範綱に導か
れて粟田口の青蓮院で慈円和尚を戒師
として得度せられた。その折、慈円和

尚が「すでに日も暮れた故、得度の式
は明朝にいたそう」と仰せられたので
あるが、それに応えて九才の親鸞聖人
が「明日ありと思ふ心の仇桜、夜半に
嵐の吹かぬものかは」と和歌をもって
訴えられたと云われている。折しも青
蓮院の境内は桜が見事に咲き誇ってい
たと想像される。「明日、桜の花見を愉
しみにしていても、夜中に嵐が吹いて
桜の花は散ってしまうかもしれぬ。私
とて明日を待たぬいのちかもしれませ
ぬ。是非今、得度の式をあげてくださ
い」と和歌をもって心の内を宣べられ
た。それを聞かれた歌人としても名の
ある慈円和尚は「僅か九才の童児であ
りながら、これほどの歌を詠まれると
は徒人ではない」と思われて、その訴
えに応えて、その場で「得度の式」を
執り行ったとのことである。

祖師聖人は僅か九才で「真に人間が
救われる道」を仏道に求めると云った
崇高な志願をもって青蓮院の門をくぐ
られた。
祖師聖人と愚生を比べ見ることなど

畏れ多いことではあるが、聖人の得度に対するお心の向き姿勢の崇高さを思うにつけ、愚生の場合、得度を受けることは如何なることなのかと云った眩かな自覚もなく、本願寺の門をくぐり「得度式」を受けたことを顧みる時、ただただ慙愧に堪えない。

得度は本来出家と同義で、頭髪を剃り落とすと同時に、内面の俗心も剃り落とさねばならない。具体的には「名聞・利養・勝他」を心の髻とし、この三つの髻を切り落とし、捨離することが得度の意味するところである。名聞は社会的評判、利養は経済的利潤、勝他は他と競って、より上につかんとする欲望。「名聞・利養・勝他」を三つの髻と表現されるが、吾人はこの三つの髻をよりよく結び上げ、吾身を飾りより美しく見せようと、日々苦心惨憺しているのが現実ではないか。「名聞・利養・勝他」が地位、名誉、財に係る問題とすれば、地位、名誉、財を得ることが人生の目的の如く争奪戦を演じているのが、人間社会の現実と思われる。

吾人は地位、名誉、財を無上の宝の如く追い求めて止まぬが、幼少の頃、大事な宝物の如く引き出しの奥に仕舞い込んでいたものを、大人になってまたまた見つけ出して、「なんでこんなものを宝物の如く大事に仕舞い込んでいたのだろう」と苦笑いすることがある。また、最近マスコミで「ゴミ屋敷」なるものが話題に取り上げられる。廻りの人から見ればゴミとしか思われない物を、ゴミ屋敷の主はゴミではなく大事な資源と主張し、隣近所に如何なる迷惑がかかるかが、片付けようとしなると云った問題がある。近隣の方々に諸々の迷惑を生じさせていることは大変問題ではあるが、ゴミ屋敷と云われる家の主人が、資源だと主張しているものをゴミだと断定してよいものかどうか。現代社会はまだまだ使用できるもの、食せるものをゴミとして廃棄していないかと云うことを考えねばならない。

仏教の唯識の方に「一水四見」という譬喩がある。一鏡四見とも云われる

譬喩で、同じ水でも天人は甘露と見、人間は浄水と見、魚は宮殿と見、餓鬼は火焰と見ると云うのである。仏教には業力所感、業縁起の教えがある。同じ人間でもそれぞれに業が違うために、同じものを見ていても各々違った認識をしていると云うことである。多くの人がゴミだとするものを大事な資源だとする人が居ても何の不思議もない。

多くの人が三つの髻「名聞、利養、勝他」、つまり地位、名誉、財を勝ち取らんと、身心を極限まで駆使している相を、仏や名だたる高僧の目にはどう映るのであるか。夏の夜の外灯に群がり突進する虫の如く、三つの髻を追い求める道は地獄・餓鬼・畜生の三悪道につながる道だ。その邪道を捨離して、心の眼を仏道に、彼岸浄土に向けよと慈悲の眼を以って見られているに違いない。「溺れる者は藁をも掴む」と云うが、人間社会に流され、溺れている吾人は藁どころか何でも掴み取って放すまいと身を堅くしている。藁にも

縋る思いを捨離して、水に身を任せば
泛くのである。

吾人は、日常何か得ることばかりを
考えて身心を用いているのが偽らぬ相
であると思われるが、自分の力で今望
んでいることが望み通りに進まぬと、
寺参りをして仏に縋って願いを叶えて
もらおうとする。仏に己の欲望成就を
祈ると云った行為は、水に溺れている
者が藁にも縋る以上に、愚痴顛倒と云
わなければならぬ。寺院に参って仏
さまに願成就を祈ると云うことは、一
般通念の様であるが、各寺院に安置さ
れているみ仏は、阿弥陀如来、大日如
来、薬師如来、釈迦如来等々、御尊号
は異なっても仏陀如来は同義で、真実
の道理に覚め證られたお方であれば、
如何なる仏さまも煩惱に迷惑する衆生
を、差別なく真実の世界へ救い導かん
とされるのが本義である。

然れば、己の欲望成就を願って寺院
参拝し御本尊に祈る行為は、例えて云
えば「胃病を患い、常に空腹感に苦し
む人が、病院へ行って食を乞う」と云

った様なものか。病院の医師はその患
者に食を与えることなどなく、「貴方は
胃病だ。その病気を治さない限り空腹
の苦しみから逃れられない」と忠告す
るであろう。己の欲望成就のために寺
へ参って御本尊に祈願すれば、仏さま
は祈願者に「その願いは迷いだ。苦し
みのもとだ。その欲心を捨離すること
が救いの道だ」と仰せられるに違いな
い。

地位が、名譽が、財が、學歷が、健
康が、よき伴侶が欲しいと利己的なご
利益を求めて寺へ参拝されるとすれば、
それは大変な思い違いで、寺の存在は
諸々の欲心に限らず、怒りや妬み心の
捨て処である。それらはすべて妄念な
るが故。然しながら一切の俗心を捨離
し悟った思いでいても、生身である以
上、煩惱の根まで截ち切ることは難く、
縁が催すれば欲や怒り妬み心は湧き水
のごとく湧き出して止めようもないの
では。

僧を出家と云う。出家とは一切の俗
心を捨離して生きる道である。併し俗

界に生きながら俗心を離れると云うこ
とは、難中の難である。故に親鸞聖人
は「非僧非俗」と仰せられた。一切の
欲心煩惱を捨離できないならば、すで
に僧ではない。しかし、俗生活をその
まま肯定して生きることができない故、
俗に非ずと、肉食妻帯の生活を慙愧さ
れながら、ひたすら仏道を歩まれたの
である。

川柳に「世の人に欲を捨てろと語り
つつ、後から拾う寺の住職」とある。
恥ず可し傷む可し。 合掌

成田 宣信（金相寺住職）



青蓮院境内地にある
京都市天然記念物の「くすのき」

どうぼうかい

同朋会

く歎異抄勉強会く

《 第九条 》く現代語訳く

「念仏を称えていまして、かつてのようにおどり上がるような喜びが感じられないのはどうしてなのでしょう？(中略)」と親鸞聖人にお尋ねしましたら、「私(親鸞)も、このことが疑問でありました。唯円房、あなたも同じ疑問をもたれたのですね。(中略)教えの道筋からいえば、喜ばなければならぬはず。しかし喜びの感情が起らないからこそ、よりいっそう弥陀の浄土への往生は間違いないといたさなくてはなりません。なぜならば、喜ぶはずのころを喜ばせないようにしているのは、煩惱がはたらくからです。如来は永劫の昔から私達を見通されて「煩惱具足の凡夫よ」とおっしゃっているのですから弥陀の他力の悲願は、このよう私たちのためなのだと思われ、いよいよ頼もしく感じられるのです。(後略)

冒頭の唯円の問いは、信仰に関わるほとんどの人々にとって、避けては通れない問題です。どんな信仰でも、「初体験の感動」がなければ入信は起こりません。しかし、それが長続きしないのも必然の問題です。(中略)

親鸞以前の仏教は、お念仏を喜べないのは、修行不足や聞法不足、または能力が劣っているからだと考えてきました。唯円もそう思っていたのです。

ところが、煩惱が作用して、念仏を喜ばなくさせているのだから、喜べないのも他力なのだと思はれていたのです。煩惱は自力で「起こせる」ものでなく、他力で「起こる」ものです。「起こす」のも「起こさない」のも自分の力でコントロールできるといふ思いがあるために、「起こる」のは自分のほうに問題があると考えてしまうのです。

「菩提心」と言ってきたころを「自力」と見抜いたのが親鸞の凄さです。そこで親鸞以前の仏教は死んだのです。そこから他力の仏教が初めて誕生したのです。弟子・唯円にそのこと(ほんとう)

う)が腑に墮ちたからこそ、第九条が歴史に残ったのです。(本文より抜粋)

く所感く

教えに出会い、まさに真つ暗闇のなかに光がさし、目の前がパツと光り輝き開けてくるような救済体験を「光明体験」といいます。著者武田定光氏のいう「初体験の感動」のことですが、これは長続きしないとおっしゃっています。

この時に、光明体験に執着してしまふと、「もうあの時のような感動が生まれないこの教えは、やはりホンモノではなかったのだ」と言つて、宗教を転々とすることになるといひます。

しかし、そのように感動が薄れてしまふような私たちだからこそ、阿弥陀如来は救つてくださるのだと親鸞聖人はおっしゃいます。ここに阿弥陀如来と煩惱具足の凡夫との徹底した関係性が表されているのではないのでしょうか。

釋宣明

御^{おん}同^{どう}朋^{ぼう}の^の声^{こゑ}

【「東京大空襲」雑記】

金相寺責任役員

篠 正美 氏

年齢を増すごとに記憶力が衰退し、点の状態のそれらがなかなか繋がらなくなりましたが、かなり強い印象として今も心に残っているものもある。

昭和十八年四月に、母に手を引かれ期待と不安を抱えながら明大前駅近くの本願寺幼稚園（本願寺和田堀廟の附属幼稚園で、九条武子や樋口一葉の墓地があり、地元では有名な寺で子どもの格好の遊び場だった）の入園式に向かった。クラス分けで私は赤組となり、桜型のセルロイド型抜きのマークを配布され、当時義務付けられていたと思われるハンカチに住所、氏名、血液型

を書いたものと一緒に胸につけ、誇らし気に帰宅したのを憶えている。



昭和十六年十二月の真珠湾への奇襲攻撃をきっかけに、昭和十七年に第二次世界大戦が勃発し、その頃は連日のように米軍の小規模な空襲があり、結局私の在延期感はその一日限りだった。

昭和十九年四月に世田谷区立松原国民学校に入学。授業らしいものはなく、空襲警報のサイレンが鳴る度に近所の上級生がロープの先端を持ち、低学年の私たちを誘導し、安全な場所に避難した。授業らしい授業はできずにその年の末から翌年の初め頃に学童疎開が開始された。資格は三年生以上で、行

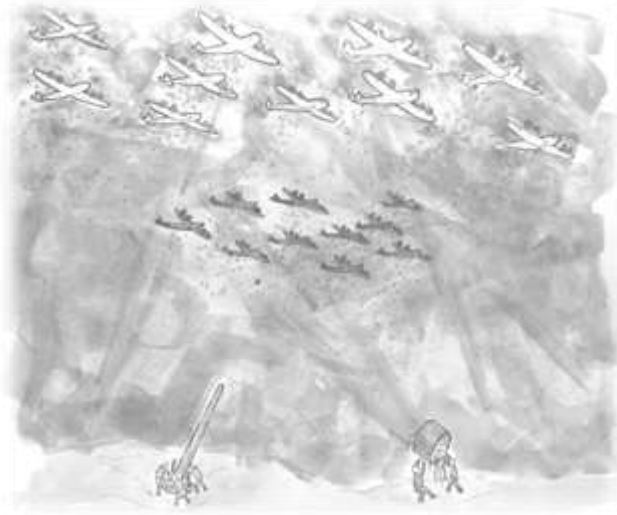
き先は茨城、福島の寺などで、上級生を見ていると遠足にでも行くかのようでもとても羨ましかった。

父は召集されていて、留守家族（ほとんどの家庭もそうだった）の我が家は兄二人と母、母方の祖父の五人で、長兄は中学二年、次兄は六年生だったが、学童疎開には行かせて貰えなかった。母の「死ぬときは家族一緒に死ぬのよ」という一言に全員が納得していたのだ。無論そんな状況で死への恐怖心などなかった。

昭和二十年三月十日未明に来襲したB29の大編隊（一説には三四四機といわれている）の無差別攻撃によって大量の爆弾、焼夷弾が投下され、発生した火災は半時間足らずで下町全域に及んだ。焼失家屋二十五万戸、四十平方キロメートル、死者約十万人の被害を生じた。私の家から南東方面の空が真っ赤だったのが鮮烈に脳裏に焼き付いている。

同年の四月十三日から十四日には東京西部地域が同様の大規模な空襲を受

け、五月二十四日には東京山の地域（世田谷、渋谷、目黒区など）と三次にわたり大空襲を受けた。この二十四日に我が家も消失した。



当日、祖父は脚が不自由であったため、兄二人が木製の雨戸を担架代わりにし、明大前と永福町の間にあった和泉田圃に避難させた。母と私は明大前駅近くにあった軍馬訓練場に逃れた。そこは小さな川が流れていて、分厚い防災頭巾をかぶっている者には熱さを

凌ぐのに都合だった。道端の焼死体や遺体を避けながら、避難の途中数メートル先に学校で私と隣り合わせだった磯山愛子ちゃんの家族も逃げていて、その家族のところに小型焼夷弾が直撃し、彼女だけ即死した。梅ヶ丘駅近くにあった根津山（今は梅の名所で、世田谷区立羽根木公園）は陸軍の高射砲陣地となっていたため、近所の人の大半がそこで亡くなった。



祖父は翌日五月二十五日に亡くなっていた。八十二歳という当時としては

長命であったが、近所の方々の協力により、焼跡の木々を集めて火葬にし、骨を拾って葬った。

● 八月六日に広島、九日に長崎に「新爆弾」が投下されたことをラジオニュースで聞いた。

これは戦争の地獄図のほんの一部だが、ともかく戦争が終わりを迎え、子ども心にも安堵した。

何という人間の愚かさ……。若い人たち、そしてこれから生を授かるであろう人々が、いつまでも「平和」を享受してほしい。



※ 今年も夏の子ども会で戦争体験を語ってくださいました篠さん。貴重な場をいただき、スタッフ及び参加者一同、心より御礼申し上げます。

副住職の

てらこや日誌



● 夏の子ども会報告

夏の恒例行事「夏の子ども会」を創志館・相模原てらこや・主催で八月六日（月）に開催いたしました。

今年は、平成最後の年ということもあり、戦争体験を当寺責任役員の方よりお話いただきました。



子どもたちに語りかける篠さん。
子どもたちはもちろん、保護者の方々も真剣に耳を傾けていました。

篠さんに子ども会で戦争体験のお話をいただくのは、今回で三度目ですが、毎回いろいろなことを考えさせられます。戦後七十三年が経ち、年々戦争体験を語る方が少なくなっていくなか、生の声を聞かせていただけることは非

常に貴重でありがたい経験です。私たち保護者はもちろんのこと、子どもたちにとつては自分たちのお祖父ちゃんお祖母ちゃんですら、すでに戦後生まれです。また、携帯ゲーム機やYouTubeなどの普及によって、子どもたちの身近にバーチャルリアリティの世界が溢れ、戦争というものが現実に起こったこととは感じられず、悲しい歴史を汲み取ることができなくなってきたようにも感じます。

しかし、そんな子どもたちにも、篠さんのお話はしっかりと届いたようで、平和な世の中に生まれたことに対する感謝の言葉なども子どもたちの間から聞こえてきました。今後ともこのような場を少しでも開いていければと思います。ご参加くださいました皆さん、本当にありがとうございます。

次回の子ども会は十二月二日に、秋の子ども会・親鸞聖人御命日の集い「こども報恩講」を開催予定です。是非、有縁の方々お誘いあわせの上、お気軽にご参加ください。

今後の予定

法要

九月二十三日 秋彼岸会

十一月十一日 報恩講

勉強会など

十月六日 午後二時

同朋会 く歎異抄学習会

(輪読・座談会)

※偶数月(二、四、六・八・十・十二月)
の第一土曜日に開催予定。

十二月二日

秋の子ども会

(子ども会・青年会報恩講)

※詳細はホームページをご覧ください

毎月一回 仏教青年会

※毎月の開催日等、詳細はホームページを
ご確認ください。か電話・メールにてお問
合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。
詳細は随時ホームページをご確認いた

編集者雑感

オウム真理教事件に関わった十三名の死刑囚の刑が執行された。あの日以来、「本当にこれでいいのだろうか？」という問いが頭から離れない。私たちは子どもの頃から「いのちは大切に」と教えられ、また縁ある人々にもそのように教えるが、そのことと死刑制度とは、果たして矛盾しないのだろうか。死刑は国による殺人とは言えないのだろうか。よく「阿弥陀如来は一切衆生をみな平等に救い上げるといいますが、それでは重犯罪者も等しく救われるのか」と問われることがある。このような問題と向き合う時、被害者感情や自己の見解で物事を判断すれば、重犯罪者が救われることなどあってはならないということになるであろう。しかし、阿弥陀如来は私たちのモノサシで考えるような善悪や優劣ではなく、いのちの本来性、すなわち「みな等しく尊い」ということにおいて、いのちあるものはみな等しく救いとげるとはたらかけてくださっているのである。もちろん簡単に善し悪しを口にすることはできないが、少なくとも仏教的眼から問われることがなければならぬのではないか。皆さんはどうお感じだろうか。

『遇くぐう』第十五号
発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺

副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL 042-778-2879 FAX 042-711-8257

e-mail info@konsouji.com

URL http://www.konsouji.com/

発行日 二〇一八(仏歴二五六一年)年九月一日